

である³。

仲井は被産性を三相に分ける。(1)被産性の第三層(出生後被産性)。これは広義の被産性であり、アーレントの言うような応答的・政治的特質としての被産性である。(2)被産性の第2相(出生時被産性)。これは狭義の被産性であり、子宮からの誕生を意味する。(3)被産性の第一相(出生前被産性)。これは子宮から誕生する前の被産性であり、「子宮から外界へと出ていないにもかかわらず、胎児はすでに何らかの意味で〈生まれている〉ということ」であるとす⁴。これらのうち、仲井がとくに注目するのは第一相の出生前被産性である。

これはどこまでも母体との密接な関係性によって成立する被産性である⁵。それはまた「周囲の人間の想像のなかに〈現れる〉という広義の〈生まれる〉にもとづく被産性」でもある⁶。以上の被産性の三相は、相互に重なり合うようにして成立していると仲井は結論する。仲井は論文中で先行研究の検討を行なっているが、その部分は本稿では割愛した。詳細は同論文を見ていただきたい。

次に、私の感じた疑問点を述べる。

仲井は被産性を、ある人にとっての〈その人自身が生まれること〉についての問いだとし、一人称の〈生まれる〉を扱うとする。「ある人間にとって自分が生まれることはどのような意味を持つのか」という問いだとも述べる。つまり、第三者の目から見たときの人間の誕生を外側からの視点で把握するための概念ではないということだと考えられる。しかしながら、仲井がその議論の核心である第一相の被産性を考察するとき仲井が採用している視座は、きわめて第三者的なものであるように見える。たとえば、仲井は漫画『透明なゆりかご』の、妊娠した妻が「お腹を触ると赤ちゃんがポコンッという反応が返ってくる」というシーンに言及し、「子宮から外界へと出ていないにもかかわらず、胎児はすでに何らかの意味で〈生まれている〉ということ」であると考察する。しかしながら、ここで捉えられている事態は、徹底して第三者からの視線、すなわち漫画の中の妻や夫からの視線ではないだろうか。妻が自分のお腹を触って、赤ちゃんとは話していると言い、夫がそれを受け取ることができていなかったという、この

³ p.20.

⁴ p.27.

⁵ 仲井は、(1)母体との密接な関係性、(2)依存性、(3)被護性、(4)未生可能性、をその特質としてあげている。p.27.

⁶ p.28.

シチュエーション全体は、生まれてくる胎児本人の視線からではなく、胎児を迎え入れる側の大人の視線、つまり産む側の第三者の視線からなされていると考えられる。少なくともこのシーンにおいては、「ある人にとっての〈その人自身が生まれること〉」は問われていないであろう。仲井の出生前被産性の特質についての考察も、私が理解するかぎり、やはり第三者的な視線からなされているように読み取れる。もし出生前被産性を正面から考察するのならば、それは胎児の状態にいる私本人の視点から見た出生前の被産性の特質を考察しなければならないのではないかと私は考える。仲井の議論では、被産性の大事な部分が取り逃がされているのではないか。

もうひとつの疑問点として、仲井は胎児の状態の被産性を出生前被産性と捉えているが、胎児はその時点ですでに活動する生物学的人間として存在してしまっている。しかしながら、生まれるとは無から主体が生まれることを含むから（輪廻転生説を取らないかぎり）、仲井の言う出生前被産性つまり被産性の第一相の、そのもうひとつ手前の状態が想定されるはずである。それは卵と精子が結合する以前というふうに想像してもかまわない。この状態から、胎児が作られていくその生成のプロセスの特質を、いわば被産性の第ゼロ相として考える必要があるのではないか。胎児はすでに子宮内に存在しているのだが、その前の段階として、無からその胎児へと生成するプロセスとしての第ゼロ相があるはずであり、ここに被産の原点があるように思われる。仲井は、出生前被産性について、「誕生前の現われ」という表現をする⁷。ここで私が思うのは、出産以前に胎児が子宮内に現われているということと、胎児が子宮内に現われるプロセスは、まったく別ではないかという点である。前者が被産性の第一相であり、後者が被産性の第ゼロ相である。そしてこの被産性の第ゼロ相を、「ある人にとっての〈その人自身が生まれること〉」の視座からどのように把握するかというのが、仲井の議論の背景に潜在している根本問題のひとつのように私は思える。

もちろん、私の以上の考えは、カヴァレーロによるアーレント批判の論点、すなわち出生の議論において「母親からの出生という事実の忘却」をしてしまい、人は「無から出てくる」という古代ギリシア的な視点の誤りを犯してしまっているものと見なすこともできるだろう⁸。しかしながら、輪廻転生説を取らないか

⁷ p.27.

⁸ p.23.

ぎり、人が生まれてくること・私が生まれてくることに、無からの主体の生成の契機があることは確実であり、被産性の議論はこの点を避けては通れないはずである。私もこの論点をどう考えればいいかはまだ分かっておらず、将来の議論が必要とされる。

それでは、仲井の被産性の概念の豊かさはどこにあるのだろうか。胎児期における母子の交流についてはすでに他の論者によっても様々に言及されており、そこに被産性の核心があるというわけでもないとは私は考える。むしろ仲井が被産性のある種の哲学的受動性として捉えた点が重要なのではないか。仲井の言葉を使うと、「自分の意志なく「生まれさせられる」という受身性」である。これは近年の反出生主義の議論においてもたびたび指摘される論点である。

むしろここで思い出されるのは、ハイデガーの「被投性 *Geworfenheit*」の概念である。ハイデガーは「現存在の被投性とは、実存のなかへ投げられていることなのである」と述べて、その受動性を強調する⁹。被投性の場合、現存在を世界へと投げ込む主体（たとえば親や神など）は想定されていない。現存在はただただ、つねにすでに投げ込まれているのである。被産性の受動性を強調すれば、被産性は被投性に限りなく近づいていく。しかしながら、仲井の言う被産性は、ハイデガーの被投性には還元されないであろう。なぜなら、私が思うに、被産性の概念は、ある主体が世界に投げ込まれるさいに、何か別の主体が決定的に関与した、それもプロセスとして関与したことで成立したと考えられるからである。言い換えれば、〈新しい主体が、既存の別の主体からプロセスとして現われ出されてくる〉というのが被産という受動的事態である。そしてその事態は、「ある人にとっての〈その人自身が生まれること〉」という視座から必ず考察される必要がある。この二律背反的な事象への着目は、被投性の概念には存在しない。仲井の論文を読んで私が感じるのは、この二律背反性にこそ、被産性の概念の豊かな可能性が胚胎しているのではないかということである。

文献一覧

居永正宏 (2012). 「他者の産出と自己の誕生肯定：森岡正博の「誕生肯定」概念

⁹ Heidegger, 2006, S.276. 邦訳（下） p.113.

- の批判的検討』『現代生命哲学研究』第1号、pp.46-68.
- 居永正宏 (2014). 「「産み」の哲学に向けて (1) : 先行研究レビューと基本的な論点の素描」『現代生命哲学研究』第3号、pp.88-108.
- 居永正宏 (2015) 「「産み」と「死」についての覚え書き : 「弔い」を手掛かりに—「産み」の哲学に向けて (2)」『現代生命哲学研究』第4号、pp.28-38.
- 居永正宏 (2015). 「フェミニスト現象学における「産み」をめぐって : 男性学的「産み」論の可能性」『女性学研究』第22号、pp.99-126.
- 居永正宏 (2016). 「産みの人称性と性的差異 : 「誕生肯定」再論としての「産む男」試論 — 「産み」の哲学に向けて (3)」『現代生命哲学研究』第5号、pp.1-12.
- 稲原美苗・川崎唯史・中澤瞳・宮原優編著 (2020). 『フェミニスト現象学入門—経験から「普通」を問い直す』ナカニシヤ出版
- 仲井慧悟 (2023). 「被産性の三相—人間にとって〈生まれる〉とはどのようなことか—」『哲学の門 : 大学院生研究論集』第5号、日本哲学会、pp.19-33.
- 中真生 (2021). 『生殖する人間の哲学—「母性」と血縁を問い直す』勁草書房
- 西平直 (2015) 『誕生のインファンティア—生まれてきた不思議、死んでゆく不思議、生まれてこなかった不思議』みすず書房
- Heidegger, Martin (2006). *Sein und Zeit*. Max Niemeyer Verlag. (マルティン・ハイデッガー『存在と時間』(上・下) 細谷貞雄訳、ちくま学芸文庫、1994年)
- 森一郎 (2008). 『死と誕生 : ハイデガー・九鬼周造・アーレント』東京大学出版会
- 森岡正博 (2011). 「誕生肯定とは何か」『人間科学』第6号、pp.173-212.
- 森岡正博 (2014). 「「産み」の概念についての哲学的考察—生命の哲学の構築に向けて (6)」『現代生命哲学研究』第3号、pp.109-130.
- 森川輝一 (2010). 『〈始まり〉のアーレント』岩波書店